

自転車ひとり旅

高2の夏休み、自転車で北海道をめぐり、東北を縦断して帰ってきたバカ息子の母親のつぶやきです。

…(前略)遠出していても、別段何の連絡もない。どこの無人駅で寝ているのか、私もずいぶん慣らされて、連絡のないのは無事の証拠、と思ひ決めることにしている。

…(中略)大体テントで夜をあかしたらしい。一度はあんまりガサゴソ聞こえるのでクマが怖くなり、張ったテントの位置を変えたこともあったとか。とにかく暗くなつては道路端にテントを張り、トラックがうるさくなる3時過ぎには

目が覚めて、夜露でびっしょりのシートをたたみ、自転車がまたがり、山を越え、向かい風に煽られながら海岸線を走ったという。「登り坂はつらいけど、後から下り坂があるからまだいいんだよ。報われたいのは向かい風だよ。後から追い風になるといい保証はもちろんなくて、ただ大変なだけなんだ」とは、経験したもののだけが言葉にできる実感にちがいない。

北海道の屋根・大雪山連峰の層雲峡を越え、美幌峠を越え、裏摩周から知床を回って北上、宗谷岬から留萌へと南下し、旭川に戻るまで8日間。着くなり「何か食べるものある?冷ご飯でもいいか

ら」と私の母を慌てさせたらしい。食事をコンビニに頼ったチャリダー(自転車での旅人)にとっては、北海道北部の道などは店が少ないものだから、空腹を抱えて走ったこともあるようだ。「食欲とは別に、米欲つていうのがあるんだ」とのたまう。

旭川でしっかり腹ごしらえをし、自転車の点検をして、今度は函館までさらに3日をかけて南下をしてきた。函館へ大間間のみつエリー、後はひたすら自転車を漕いできた。東北を4日かけて縦断して帰宅前日の夕方、「どんなに遅くなつてもご飯を食べたいから、明晩よろしくね」と電話があった。台風と遭遇しやしないかと、こっちはさすがにはらはらしながら居たが、いつもの学校帰りとおなじように無事に家の庭に入ってきた。ちよつと痩せて、そして顔は真っ黒にして。

旅の来し方は、本人は、ひとしきり旭川ではあちゃんにも話したし、ところどころで友達にハガキも書いていたよななので、それほど家で話すわけでもない。翌朝、予定に入っていた模擬試験を受けに、自分と一体と化したサドルに

またがって、いつもどおり日立の学校に向かつて行った。

きつと感じただろう風の心地よさや荒々しさ、光の暑さや、そぼ降る雨の冷たさ、空の青さ

のの違いに、漆黒の暗さ、ひもじい思いも、そして「もう少し漕ぎたかつたんだけど、ぜんぜん脚があがなくなつちやつて」と味わたつた限界、どれひとつとつても誰のものでもない、本人が自分の身体に感じ取つたものだ。彼の身の内で体感した宝物だ。それを想つと、「ここに居れば、おいしいご飯は食べられるし、雨露しのぐ寝床はあるのに」とぶつぶつ言つていた母親でも、とても羨ましい気持ちにさせられる。

(後略)...

北茨城市 日立一高を卒業する鈴木平人君 毎日往復52kmを自転車通学

北茨城市磯原町の自宅から日立市若葉町にある日立第一高等学校までの往復52kmを2年半、毎日自転車通学した同校の鈴木平人(はると)君が、晴れて卒業の日を迎えた。

当初は電車通学だった鈴木君が自転車に切り換えたきっかけは、両親から北茨城市内の同校の女生徒が自転車通学をしている話を聞いたことから。早速、家の買い物用自転車で学校に行つてみた。電車なら片道50分、変速器なしの自転車だが、頑張れば1時間10分思つたほど差はなかった。通学定期は残つていたが、1年の10月頃から自転車通学を始めた。

「3年になって受験が近くなつたら、自転車という訳にもいかないだろう」と、軽く考えていた鈴木君だが、結局卒業を迎えるまで中断することはなかった。「いつまで続くかな」と見ている



鈴木君と愛車

というわけで、今号は転載ばかりで面目ありません。これまた全文はインターネットでお読みいただけます。それと関係ないようなあるような、左記は、タウン誌に載つた平人の記事です。

